

## ヨハネ第一3章19-21節 「たとえ心が責めても」

### 1A 確信のある歩み

#### 1B 罰せられない安心

1C 聖なる方の前

2C 愛されている者たち

3C 血潮で清められた聖所

#### 2B 真実な行い

1C 光の中

2C 神の命令

3C 兄弟への愛

### 2A 責められる心

#### 1B 心の責め

1C 恐れ of 奴隷

1D 律法違反

2D 獄屋

2C 恥と遺棄

1D 民からの断ち切り

2D 御顔の背き

3C サタンの告発

#### 2B 心よりも大きい方

1C 肉の弱さ

1D 心の律法

2D 罪のからだ

2C 御子の受けた処罰

1D いのちの御霊の原理

2D 知られている者

### 3A 責めない心

1B 神に近づく祈り

2B 主の来臨の希望

## 本文

ヨハネの第一の手紙 3章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回で2章と3章3節まで来ました。今日は午後に3章4節から残りを読んでいます。今朝は、19-21節に注目します。「<sup>19</sup> そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安ら

かでいられます。<sup>20</sup> たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。<sup>21</sup> 愛する者たち。自分の心が責めないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」

今朝は、ここの「神の前で確信を持っていただけること」また「心安らかでいただける」ことについて学びます。神の前に出ていくことを、心が責められて、はばかれることが、よくあるからです。

### 1A 確信のある歩み

#### 1B 罰せられない安心

私は、いろいろな背景の人の救いの証しを見たり読んだりしますが、最近、シーア派のイスラム教徒だった人が、悔い改めてイエス様を信じた証しを聞きました。彼はイラン人で、とても熱心に信じていて、異教徒はすべて殺し、イスラエルもなくなければいけないとまで信じていました。革命防衛隊に若い頃は入っていたのです。けれども、ある時にクリスチャンに出会いました。その人があまりにも平安な表情をしているので、驚いたのです。それからイエス様を信じました。そして人生で初めて、教会に行きました。礼拝に行った時に、神のご臨在に圧倒されました。神の憐れみの栄光に包まれた思いでした。<sup>1</sup>

#### 1C 聖なる方の前

そこで、彼は、とんでもないことになったと思ったのです。今、聖なる神の前にいるのに、自分や他の人たちはなんで大丈夫なのか？と思ったのです。聖なる神の中に自分たちがいることなど、到底できないのに、恵みによっていることができている驚きです。

キリスト者の恵みは、ここにあります。私たちが、聖なる神と交わりをすることができていることです。イスラエルの民が、シナイ山にまで来て、主がそこに天から降りて来られる時に、主は境を設けて、そこから入って来るなど命じておられました。なぜなら、人も家畜も、打たれて死んでしまうからです。聖なる方の前に来るといのは、そういうことです。民は主の声を聞いたので、恐ろしくなり、死ぬかもしれないと思いました。それでモーセに、代わりに聞いてほしいとお願いしました。

#### 2C 愛されている者たち

しかし、私たちキリスト者は、なぜか、聖なる神の前に出ているのに、もちろん畏怖の思いはありますが、恐れ退くことはありません。この違いは何でしょうか？それは、愛されているのを知っているからです。

とても高い地位にいる人で、誰もむやみに近づかない人でも、大胆に、誰の許可を得ることもなく近づく存在があります。その高い地位のお孫さんです。例えば、大企業の社長さんと会うなら、ア

---

<sup>1</sup> <https://youtu.be/3bygvw6Nk8M>

ポを取らないといけなく、セキュリティーも通らないといけないですね。でも、お孫さんは、アポなしで、セキュリティーのブザーが鳴っても、お構いなしですね。なぜか？おじいさんから、愛されていることを知っているからです。

イエスに親しみを持って近づいていた人たちがいました。ベタニアにいた姉妹と兄弟です。マルタ、マリア、そしてラザロです。彼らは、聖なる方と親しくしていました。「ヨハ 11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。」とあります。愛を知っているのに、恐れることが全くなかったのです。「Iヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

### 3C 血潮で清められた聖所

そして、なぜ聖なる所においても、私たちは、守られているのか？それは、何よりも聖所が、キリストの血できよめられているからです。「ヘブル 9:12 また、雄やぎと子牛の血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度だけ聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられました。」主の流された血潮があるので、私たちは聖なる者とされているので、守られているのです。

### 2B 真実な行い

本文を見ていきます。19 節で、「**私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に心安らかでいられます。**」とあります。私たちは、真理に属していることを知っている時に、神の前で心安らかでいられます。周りがどんなことがあっても、心は安らかです。

### 1C 光の中

真理に属しているとは何でしょうか？ヨハネは、この手紙で話してきました。1 章 7 節には、光の中に歩んでいるならば、真理を行っていることを教えています。「もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」これは、心安らかなことです。御子の流された血がすべての罪から私を清めておられるのを知ることができるからです。

### 2C 神の命令

そして、神の命令を守っている時も真理に属しています。「2:3 もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。」神の命令を守っているならば、神を知っているという恵みにあずかれます。

### 3C 兄弟への愛

そして、神の命令とは、兄弟を愛することだと、ヨハネは第一の手紙で話しています。「3:14 私たちは、自分が死からいのちへと移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。」兄弟を愛

していることによって、死んでいたのが、今はいのちを得ていることで、確信が持てるのです。

## 2A 責められる心

### 1B 心の責め

ところが、これらのことを私たちは、必ずしもできないことがあります。それで心が責められるのです。心の責めとは、一体、どのようなものでしょうか？

### 1C 恐れ of 奴隷

#### 1D 律法違反

それは、自分が罪を犯した時があります。罪とは、神の律法に違反することですね。神が、初めの律法、あるいは命令を、エデンの園で置かれましたが、善悪の知識の木から実を取って食べれば、死ぬと主は教えられました。罪から来る報酬は死です。このことを恐れて、責めがあります。

#### 2D 獄屋

そして罪を犯すとは、ちょうど返済できない借金を抱えているようなものです。それで、自分が牢屋に入れられているような状況になります。イエスが、喩えを語られて、罪を犯した者を借金した者として語られました。自分は王から一万タラントを帳消しにしてもらったのに、何と百デナリ、負債のある者を赦さないで、牢に放り込みました。それで王は、彼の負債をすべて返済するまで、牢屋に入れておくようにさせたのです。

このようにして、心の責めがあることによって、私たちは神に罪を犯したということで、死を意識して恐れています。そして、恐れの中で牢屋に入れられているかのように、閉じ込められます。恐れに縛られた奴隷のようになってしまうのです。

### 2C 恥と遺棄

そして、心の責めは、恥となります。神の民の中にいることができず、また神のおられるところから、引き離されてしまいます。

#### 1D 民からの断ち切り

イスラエルの民に対して、主は、「断ち切る」という言葉を使われました。「民 15:30 この国に生まれた者でも、寄留者でも、故意に違反する者は【主】を冒瀆する者であり、その人は自分の民の間から断ち切られる。」これは、引き離されるということです。

姦淫の現場で捕らえられた女のことを思ってください。パリサイ人たちが、イエスの前に連れてきたのです。彼女にとって、どれほど、恥ずかしいことだったのでしょうか？自分がだれも見ている中で、石打になるのです。また、不道德な女が、イエスがおられるパリサイ派シモンの家に来たことを思

い出してください。彼女は、イエスの御足を涙を落し、髪の毛でぬぐい、油を塗りました。シモンは、心で、彼女をふしだらな女とみなしていました。このようにして、人々から引き離されるという思いをします。人々から、その共同体から引き離される思いをするのです。

## 2D 御顔の背き

そして何よりも、主ご自身から顔を背けられます。「申 31:18 わたしはその日、彼らが行ったすべての悪のゆえに必ずわたしの顔を隠す。彼らがほかの神々の方に向かったからである。」このように、主ご自身が顔を隠してしまいます。主が祝福される時は、御顔を照らしてください。それは、快く受け入れておられるのですが、ここでは顔を隠す、つまりそっぽを向くということです。

## 3C サタンの告発

私たちが罪を犯せば、神の命令を守っていなければ、この心の責めが与えられます。そこで、サタンが執拗に責め立てるのです。いかに、神が自分を見捨てているおか、顔を背けているのかとそそのかします。自分は教会の仲間集う資格のないものであると、決めつけます。そして、自分は神から絶えず鞭うたれて、罪という牢獄の中に入れられている思いがします。

サタンは、私たちの心の責めを煽り立て、告発するのです。サタンは、「兄弟たちの告発者」と呼ばれています(黙示 12:10)。

## 2B 心よりも大きい方

このようなことなので、心が責められると、どれほど私たちを苦しめるかしれません。世においては、自分のしていることは悪くないと言い聞かせることで、苦しみを取ろうとします。自分の犯している罪は、生まれ育ちのせいなんだよ。性格の弱さだけの問題だから。あるいは、罪の行いでさえ、それは良いことだと、悪を善に変えてしまうこともあります。しかし、心は知っています。そこには良心があり、良心は神からのものだからです。

しかし、20 節に驚くべことを、ヨハネは書いていますね。「たとえ自分の心が責めたとしても、安らかでいられます。神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです。」心が責めていても、なんと安らかでいることができるというのです。どういことでしょうか？大事なのは、「神は私たちの心よりも大きな方」ということだとあります。

## 1C 肉の弱さ

## 1D 心の律法

キリストを信じているのに、それでも心が責める時、それは心では、神の律法に同意しているからだ、パウロはロマ書 7 章で話しました。

## 2D. 罪のからだ

しかし、からだに罪の原理が働いていて、それで、自分が憎んでいることを行ってしまうと話しています。それで最後に嘆くのです。「ロマ 7:24 私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」

## 2C 御子の受けた処罰

しかし、そこからパウロは思いが変えられます。自分の心は責めています。けれども、自分の心よりも大きい方がおられて、神であり、キリストなのだということです。自分に嘆いて、絶望した直後に、感謝しているのです。「7:25 私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」パウロは、心よりも大きい方がおられることに気づいたのです。

## 1D. いのちの御霊の原理

そして、ロマ 8 章に入ると、「私」という主語がなくなります。主語は、もっぱら神であり、キリストです。キリストにあって、神がなしてくださったことを話します。「ロマ 8:1-3 こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。」私たちには、肉の弱さがありますが、しかし、神はその肉の姿をもって、キリストに責めを負わせたのです。だから、キリストにある者が、決して罪に定められることはないのです。

このことによって、罪と死の律法から、いのちの御霊の律法が、私たちを解放しました。罪と死の律法、あるいは原理においては、私は、心の責めの中にとどまっています。けれども、いのちの御霊の律法は、私の心の責めよりも大きい、神に働いていただくのです。神は恵みによって、私たちの欠けがあっても、祝福してくださるのです。ご自身の変わらぬ愛をもって、祝福してください。だから、心に責められるところがあっても、なおのこと安心していられるのです。

## 2D. 知られている者

とつても、とつても大事なことは、私たちの心によって、私たちの信仰が成り立っているのではないのです。心ではなく、私たちの神によって成り立っているのです。私たちが神を知っている前に、私たちが神に知られるようになったのです。「I コリ 13:12b 今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」私たちは、神を知っている以上に、神に知られています。完全に知られています。そして、私たちは自分自身を知っている以上に、神が自分を知っておられます。

ですから、私たちはたとえ、心に責めがあろうとも、神によって守られていることを知っているの

で、それで安らかにできるのです。

### 3A 責めのない心

そして、もちろん、心に責めのないことが望ましいです。「<sup>21</sup> 愛する者たち。自分の心が責めのないなら、私たちは神の御前に確信を持つことができます。」とっています。

#### 1B 神に近づく祈り

私たちが神に近づく時に、御前で確信を持っていることが必要です。「ヘブル 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」この「大胆」は、確信と言い換えることができます。主の前に出る時に、大胆に行くことができるのです。そこは、恵みの御座になっているからです。

#### 2B 主の来臨の希望

そして将来の希望の時にも、御前での確信が必要です。「2:28 さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありません。」

このように、たとえ心が責めても、安らかでいられます。主は、私たちの心よりも大きい方です。そのようにして守られながら、私たちは成長します。心に責めがないように歩むことが、ますますできるようになります。私たちの行いによって、神の祝福は変わりません。神が、キリストにあってすでにしてくださっているのです、私たちはそれを信仰によって受け止めるだけでよいのです。